最近、昭和時代の歌の特集番組があると、時々興味を持って観る。子供の頃は「ナツメロ」番組で、母親に「誰？」と聞きながら、未知の人に興味を覚えたが、今は何人か知っている顔の現在と過去を見て、人間の変化を楽しんでいる。（上手に年齢を重ねて、美しく年を取っている人が多い）

さて「歌詞」について考えると、同じ悩みにしても、昔は「自己の内面を冷静に見つめて語りながら、他人に考えさせるような」感じがするが、今は「自己内面を吐き出しながら、自分を鍛えていきつつ、他人にエールを送るような」気がする。つまり「感覚の共有」という点において、昔は間接的で、今は直接的な感じがする。

そして曲想であるが、昔は音階が豊かで（音の幅が広く）、歌手も声量があって、透明感のある声がのびやかに響いていた。聴いていて気持ちがよい。今は音階が狭い平坦な曲が多く、声量が乏しい場合が多いので、（声量が乏しいから曲を平坦にせざるを得ないのか？）絞り出すような歌い方を聞いていると、自分の喉が痛むような感覚に襲われる。また現代、上手と言われる人は「丸太のような声」か「針金のような声」の人が多い。昔はソフトな声の中に内心の力強さがあり、今はハードな声の中にもろさを含んだ内心が垣間見える。しなる棒は元に戻り、固い棒は折れるという言葉が頭に浮かぶが、昔の人は背筋まっすぐなのに折れない棒、今の人は体を曲げて折れる棒。どう見ても心情表現ではなく、声が出ないので、身体を曲げることによって声を絞り出しているという感じが否めない。

それから、外見である。私が「はぁ～」と口をぽかんと開けて、思わず見入ってしまうのは、メイクと衣装の生地の質、スタイルの良さである。芸能人と言えば、昔は「特別な人」、今は「身近な人」という感じだが、それが衣装やメイクに表れている。昔の歌手は人形のようだったなと思うのは、ドレスやスーツの上品さ、自然に見える女性のつけまつげ、およびカラフルなメイクである。洗練されたデザインの衣装の生地や仕立ては上質であり、ほとんどのアイシャドウは透明感のあるブルー。つややかで上品で健康的に見えるテレビメイク。そして男性も女性もスタイル抜群。「男らしさ・女らしさ」が映じる美しさである。女性にしか表現できない華やかさ、男性にしか表現できない包容力がはっきりしていて、そこが魅力なのである。（現代は女性よりも、女性らしさを表現できている男性がいるが、その場合、本当の女性より魅力的である）男女平等社会の傾向として重宝される中性的ファッションは、モノトーンに偏りがちな分、個性の発現が難しいので、人間の中身の魅力が大事だろう。

近年、美輪明宏さんの「ヨイトマケの歌」が新しい世代の心を揺さぶったが、二葉百合子さんの「岸壁の母」にも驚いた。歌詞の内容もさることながら、声の演技力は、生命の中の覚悟を持った魂の表れではないか。「伝える」という「歌手の使命」のようなものを感じる。

そのほかに驚いたこと。若い頃から外見にほとんど変化のないイルカさん。倍賞千恵子さんの声の透明感と伸び。石原裕次郎さんの声がソフトなこと。歌ではなく、作曲家の中村八大さんの伴奏シーン。服部克久さんの指揮の様子。

オーケストラのほうが豪華かと思いきや、ピアノ、ギター、ベースなど、バンドによる伴奏のアレンジや音響が心地よく、その演奏の仕方も印象に残った。(2018.5.1)